野田宇太郎 文学散歩

第18巻

文一総合出版

著者略歴　明治42（1909）年，福岡県三井郡に生まれる。中学卒業後，詩作に入り，上京して出版界で『文藝』『藝林閒歩』等を編集。戦後，『新東京文学散歩』に続いて一連の文学散歩を発表。昭和52年(1977)年，明治村賞を受賞。全詩集『夜の蜩』『日本耽美派の誕生』『日本の旅路』など，文学散歩のほか，詩集・近代文学研究・評論・随筆集などに多数の著書がある。

野田宇太郎文学散歩　18
関西文学散歩　京都・近江篇

昭和52年7月10日　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎
発行者　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1977
0395-90118-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目

次

京都

京に著く　一三

旧き都　一六

高瀬川　一九

「高瀬舟」　罪人と同心　川のほとり

先斗町　二六

先斗町と古典　「長町女腹切」　『祇園夜話』

祇園　三四

祇園の文学　秋江と勇　中島棕隠

水辺の歌碑　四二

白川のほとり　『祇園歌集』

疏水べり　四七

龍之介と浩二　『蝦蟆鐵拐』　露伴と疏水

清水と円山　五三

長楽寺にて　五七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

上田敏とピアノ　六一
雨　六五
「檸　檬」　六八
東三本樹の宿　七一
信楽と文学者たち　幹彦と潤一郎　「白樺」同人と信楽
御所と鷗外　八二
「盛儀私記」　参観
古本あさりの歌　八九
鷗外と彙文堂　彙文堂の話
鼓村の面影　九五
八文字屋跡　九八
「南蛮寺門前」　一〇二
木下杢太郎の楽劇　姥柳町の南蛮寺跡
西本願寺　一〇七
「望郷の歌」　一一〇
詩のなかの京都　京都の泣菫

糾の森　一二六
みだれ髪　一三〇
粟田山　恋　永観堂
若王子山　一三八
同志社墓地　「黒い眼と茶色の目」の墓
同志社　一三三
同志社と文学　『十二の石塚』　蘆花
天授庵　一四三
『黒い眼と茶色の目』　若き日の蘆花
上田秋成の墓　一四八
西福寺　秋成の生涯　追慕
源光院の小径　一五六
岡崎の路地の奥　一六〇
上田敏旧居跡　初対面
鐵幹の生れた寺　一六五
朱色の夢　一六八

府立図書館　一七一
湯浅半月の業績　白樺美術展
蕪村の墓　一七七
金福寺　閑古鳥
タウトの眼　一八三
修学院離宮　桂離宮
光悦寺　一八九
石と庭と　一九二
保津川下り　一九五
「虞美人草」　泣菫秘話
落柿舎　二〇一
芭蕉と去來　「嵯峨日記」
祇王寺　二〇七
祇王哀話と美妙　樗牛と素庵
清滝　二一三
宇治川のほとり　二一六

モラエス　花屋敷の老女
田原の里と蕪村　二三
鞍馬の歌碑　二六
寂光院　二九
『平家物語』と大原女　『俳諧師』と晶子の歌
比叡　三五
『虞美人草』と八瀬　鵜飼の歌　東塔をゆく
三条万屋にて　四三
漂泊の人、愚庵　五〇
愚庵の生涯　結廬の跡

近江

さざなみの都　六三
湖畔の道　六六

フェノローサの墓　二六九
芭蕉の影　二七三
俳人墓地　義仲寺の墓　幻住庵のあと
石山にて　二八〇
若き旅人　藤村と紫式部と
弔花の墓　二八六
安土　二八九
古都のまぼろし　李太郎と安土　古城址
土山と森鷗外　二九八
白仙の墓をたずねて　常明寺　将軍地墓地と鷗外の宿

関西文学散歩　京都・近江篇　おぼえがき

本書は初稿を大阪読売新聞に昭和三十一年から昭和三十二年に亙って連載した「関西文学散歩」のうちの「京都・近江」篇である。最初の出版に当っては加筆補正のほか一部書き下し原稿も加えたが、その後の地域的変化などは極端な場合に註記を入れたほかはすべて初稿執筆当時の記録とすることに留意した。

（著者）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

関西文学散歩

京都・近江篇

京

都

京に著く

京都の玄関は京都駅である。玄関に立てば挨拶をせねばなるまい。わたくしの気ままな京都の散歩もここからはじまる。

今の京都駅もその附近の七条の街も、まことに立派な建物になっていて、わたくしが昭和のはじめに来た頃とはまるで違っている。もっともはじめて来た時は、わたくしは九州の片田舎の中学を卒えたばかりだったから、ただ大都会の大きな駅だと思っただけで、別段駅の構内がどうだったなどとの記憶もない。覚えているのは、父を亡くしたばかりだったから、母といっしょに駅からほど近い七条堀川通りの西本願寺にお詣りさせられたことである。その時のことが忘れられず、その後も一人で京都に来れば、まずそれとなく西本願寺を訪れる習慣になったが、本願寺のことは別に述べることにして、また京都駅のことに戻る。

今の立派な駅にくらべると明治時代の京都駅の建物は、古写真などで見ても判るように、貧弱なも

のだったらしい。今とくらべて貧弱なその京都の駅に、夏目漱石が第一歩を印したのは明治二十五年（一八九二）の夏のことである。二十六歳で帝国大学文科大学の特待生となった学生夏目金之助であった。年譜によると漱石はその夏に岡山にあそび、伊豫松山に帰省中の学友正岡子規を訪れたが、京都を訪れたのもその旅のときで、子規と同行したのである。そして、その次に京都駅のプラットホームに漱石が立ったのは、明治四十年（一九〇七）三月であった。

漱石はすでに東京帝大と第一高等学校の講師を辞して、朝日新聞社に入社することになり、かねてから執筆中の「文学論」を片づけると二週間ばかりの豫定で京阪地方の旅に出た。当時の京都には親友の狩野亨吉が帝国大学文科大学長をしていたので、まず京都駅に下車したのである。夜のことだが、プラットホームにはその狩野亨吉と、これも親友で三高に勤めていた菅虎雄が迎えに来ていて、三人は駅前から人力車に乗って、下鴨の糺の森の畔にあった狩野の家に落ちついた。其時のことをはじめて大阪朝日新聞に書いたのが「京に著ける夕」という小品文であった。

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七条のプラットフォームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱつと吐いて、暗い国へ轟と去つた。

唯さへ京は淋しい所である。原に真葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間にある、一条、二条、三条をつくして、九条に至

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo